

【2020 年度第 2 回特別講演会報告】

北海道有珠地区における 17 世紀のアイヌの生活と災害

永谷 幸人 (伊達市噴火湾文化研究所)

近年、北海道南西部の噴火湾北東岸に位置する伊達市有珠地区で活発に行われている考古学的な調査によって、17 世紀を中心としたアイヌの集落の様相が明らかになってきている。同時に、人々の暮らしに火山災害が大きな影響を与えたことも見えてきた。本発表では、17 世紀中ごろのアイヌの暮らしと、大規模災害が彼らの暮らしに与えた影響について、発表者らが行っている有珠地区での発掘調査の成果を中心に紹介する。

有珠地区は 17 世紀に限らず、縄文早期から人々の活動が活発な地域であった。それは、1 万年以上前に発生した有珠山の山体崩壊が起伏に富んだ土地と転石海岸や砂浜からなるアメーバ状の複雑な海岸線を形成したことによって、「天然の良港」が形成されるとともに多様な動物相が生まれ、自然の恵みを得て生きる人々の生活を支えたからである。

しかし、火山が与えるのは恩恵ばかりではなく、時として人々の暮らしに甚大な被害をもたらす存在でもあった。有珠地区の遺跡には 17 世紀中ごろに発生した二度にわたる大規模火山災害の痕跡が残されている。これらはいずれも数百年に一度と言われる規模の災害であった。その一つが 1640 年に発生した北海道駒ヶ岳の噴火・津波で、もう一つが 1663 年の有珠山噴火である。

これまでの発掘調査によって、この二つの大規模災害に被災した集落の様相が明らかになってきたが、有珠地区に多く残された集落跡の遺構変遷からは、1640 年の駒ヶ岳噴火・津波の直後の復興と 1663 年の有珠山噴火後の土地の利用方法の変化が見て取れる。当時この地に暮らしたアイヌによる記録ではないため正確な状況は分からないが、文献記録によると人的被害は駒ヶ岳噴火・津波の方が甚大であったとされるが、集落の様相の変化からは、有珠山噴火の方がより大きな影響を現地の人々に与えたようにみえる。これは、わずか 23 年という短期間で繰り返し被災したことや、有珠山噴火の火山灰が厚く堆積したことで周囲の景観が一変してしまったという絶望感といった精神的なダメージが大きかったのではないかと推察される。

このように、わずか 23 年という短期間に二度も数百年に一度という規模の災害に被災し、物理的にも心理的にも大きな影響を受けた人々であったが、この有珠の地を放棄することはなかった。二度目の被災直後に形成された貝塚がそのことを物語っている。さらに、人々は 1663 年の噴火で厚く火山灰が堆積したことによる地形の変化をも利用して、これまで使いにくかった土地を積極的に利用するようになったようである。

被災を繰り返しながらこの地に暮らした 17 世紀の有珠地区の人々は、人間の強かさを教えてくれるとともに、なぜ私たちがその土地に住まうのか、なぜその土地に縛られるかという問いも投げかえているように思う。

謝辞：最後に、私たちの調査研究にご理解ご協力いただいております、伊達アイヌ協会の皆様、地域の皆様に感謝申し上げます。また、発表の機会をくださった北海道民族学会の皆様にお礼申し上げます。なお、本発表は、科研費 19J01352 基盤研究 (B) 「巨大噴火・津波の痕跡を軸とした 17 世紀アイヌ文化と環境に関する学際的研究」 (研究代表者：添田雄二) の成果の一部です。